

# 知的障害児を対象とした自己決定による 活動参加に関する予備的研究

○宮野希 細谷一博  
(北海道教育大学大学院教育学研究科) (北海道教育大学)  
KEY WORDS: 知的障害児 自己決定 活動参加

## I 問題と目的

知的障害児が主体的に活動に参加するための方法論の一つとして、自己決定がある。自己決定とは、自らに関する行動を自ら選択・決定する能力である(Deci&Ryan,1985;Ward,1988;Martin&Marshall,1995;Wehmeyer,1998)。しかしこれまで自己決定における評価として、心理的側面や行動側面からの根拠のある効果・課題は明らかにされていない(松田ら,2007)。そこで本研究では、自己決定して活動に取り組む場合と他者決定して活動に取り組む場合の2つの場面を設定し、比較することで知的障害児が自己決定した際の活動参加の様相を明らかにすることを目的とする。

## II 方法

対象児: 知的障害特別支援学校に在籍する児童6名とする。

活動内容: 対象年齢が2歳以上で、対象児童が経験したことがあると考えられるものを活動として設定した(ジグソーパズル、ぬりえ、めいろ、パターングラム)。

実験の手続き: 活動内容を説明後、4つの活動を一度体験し、観察①で従事する活動を決定(自己/他者)し与えた。実施中は途中で活動を変更してもよいことを伝え、実験者は退室し、対象児は1人で3分間活動に従事した。3分後、実験者は一度部屋に戻り、観察②で従事する活動を与える。途中で活動を変更してもよいことを伝え、実験者は退室し、対象児は1人で3分間活動に従事した。3分後、実験者は部屋に戻り、対象児と活動に対する自己評価を行った。

評価: 「1.活動変更の有無」「2.自己評価」「3.従事率×自己評価」とし、「活動変更の有無」、「従事率×自己評価」は大学院生2名によるビデオ分析を行った。自己評価は、桜井(1984)が開発した自己評価の動機付けモデル(SEM モデル)を参考に作成した。認知レベル(動機(意図)、有能感)、感情レベル(有能感、自己決定感)、動機づけレベル(有能さへの欲求、自己決定への欲求)を5段階で自己評価した。認知レベルの有能感、活動に対して成功・失敗した原因を4要因から1要因を選択させた。

## III 結果

### 1. 活動変更の有無

観察①において自己決定場面で活動の変更はなく、他者決定場面で活動の変更は3人だった。観察②において、自己決定場面で活動の変更は3人、他者決定場面では、観察①において途中で活動を変更した3人のうち、さらに変更した児童は、1人だった。よって、自己決定場面において、一部の対象児は自由に活動の変更ができる場面でも、自己決定した活動に従事する様子が見られた。

### 2. 自己評価 (Table1・Table2)

自己評価において、自己決定場面で感情レベルの自己決定感の評価点が高いことから、自己決定しながら、「自己決定している」という感情を持つことができたといえる。

### 3. 従事率×自己評価 (Table3)

自己決定(他者決定)した活動に対する従事率を算出し、作成した換算表を用いて「従事時間×自己評価」を得点化し、

自己決定場面と他者決定場面の2つの場面で比較検討した。その結果、従事率において DAM-MA(a)と(c)は、他者決定場面の方が高く、DAM-MA(b)と(d)は自己決定場面の方が高かった。「従事率×自己決定」の得点において、DAM-MA(a)と(c)は、他者決定場面の方が得点は高く、DAM-MA(b)と(d)はあまり変化が見られなかった。また、DAM-MA による従事率×自己評価の換算得点における違いは見られなかったが、6人中4人が自己決定場面の方が従事率が高い結果となった。

Table1 自己評価(n=6)

評価項目/ 評価	認知レベル		感情レベル				動機づけレベル			
	動機(認知)		有能感		自己決定感		有能さへの欲求		自己決定への欲求	
	自己	他者	自己	他者	自己	他者	自己	他者	自己	他者
5	3	4	3	2	4	2	5	3	4	3
4	1	1	1	3	1	2	0	1	2	2
3	0	1	0	0	1	2	1	1	0	0
2	1	0	1	0	0	0	0	1	0	1
1	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0

Table2 認知レベルにおける有能感(n=6)

	自己		他者	
要因	成功(n=5)	失敗(n=1)	成功(n=6)	失敗(n=0)
能力	1	1	1	0
努力	2	0	2	0
困難さ	1	0	1	0
運	1	0	2	0

Table3 活動従事率×自己評価 換算得点(n=6)

場面	活動従事率				活動従事率×自己評価得点			
	自己決定		他者決定		自己決定		他者決定	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
DAM-MA								
a	3:0-3:11 (n=1)	50%	-	91%	-	34点	-	54点
b	4:0-4:11 (n=2)	59.5%	27	46%	16	23.5点	11	22.5点
c	5:0-5:11 (n=1)	18%	-	86%	-	20点	-	53点
d	6:0-6:11 (n=2)	44.5%	39	0%	0	23点	22	21.5点

## IV 考察

知的障害児が自己決定することで一部の児童において、活動参加の様相に違いが見られた。「1.活動変更の有無」から自由に活動に従事できる場面においては、自己決定した活動に対して従事する様子が見られた。また、「2.自己評価」の結果、「自己決定している」という感情を持ち自己決定している対象児は多く、感情と行動の一致が見られた。しかし「3.従事率×自己決定」の結果、DAM-MA による自己決定場面と他者決定場面における違いはみられなかった。以上のことから、知的障害児は他者決定場面より、自己決定場面の方が1つの活動に対する従事率が高く、自己決定感を持って活動に参加する様相が見られることがわかった。しかし、本研究では対象児が6名であり知的障害児の自己決定場面における効果が不明瞭であることから、今後さらに多くの知的障害児を対象に実験を重ねていき、より明確な様相について検討していく必要があるといえる。

(MIYANO Nozomi HOSOYA Kazuhiro)